

大学の授業評価の課題と問題

- 学生への説明責任に焦点をあてて -

秋山朝康

(文教大学文学部)

An Investigation of Issues and Problems of Student Class Evaluation : Focusing on the Accountability to our Students

AKIYAMA TOMOYASU

(Faculty of Language and Literature, Bunkyo University)

要旨

この論文では3つの情報源(学生からの授業評価のアンケート結果、筆者の作成したアンケート結果、授業を通して学生の学力の変化)を利用し、大学の授業評価の現状と課題を学生への説明責任という視点からその可能性を検証し、その課題と問題を論じる。

具体的には、筆者自身が担当している一般英語の授業(2005年度・前期、英語)を使い、受講した学生に説明責任をどのように果たしていくべきかの可能性を探求する。

1. はじめに

最近、多くの大学では授業評価と称して、学生にアンケートを実施している。本学でも学期の終わり頃にアンケートを実施しているが、時間の制約のためにその結果は授業終了後(約1~2ヶ月後)に知ることになってしまう。そのため、授業評価の結果を踏まえて教員が受講した学生へ直接フィードバックをするのは現時点ではかなり難しい。学生から教員へ、教員から学生への双方向のフィードバックができる評価の方法はないものだろうか。

授業を受講した多くの学生が最も関心があることは単位取得できるかどうかであることは明白であるが、次に学生が関心があることの一つに、各個人の学力がどのように変化したかであろう。一般英語を例にとると、13週

(約26コマ)という比較的な短い授業期間ではあるものの、授業でどのくらい実力がついたか(あるいは、変わらないか)を学生に報告することは、大学の教員の使命であると思われる(酒井, 2005)。

この論文では3つの情報源(学生からの授業評価のアンケート結果、筆者の作成したアンケート結果、学生の授業を通しての学力の変化)を利用し、大学の授業評価の現状と課題を学生への説明責任という視点から論じる。

具体的には、筆者自身が担当している一般英語の授業(2005年度・前期、英語)を使い、受講した学生に説明責任をどのように果たしていくべきかの可能性を探求しその問題点を論じる。

2 本研究の背景

2.1 説明責任：大学の授業での解釈

説明責任（アカウントビリテイ）を柳瀬（2005:30）は今後教育界のキーワードの一つになるであろうと考え、この言葉が持つ意味を3つのレベルで述べている。

説明責任とは：

- 1) 責任の範囲や責任を果たしたかどうかを決めるのは相手（学生）方である。
- 2) きちんと行動をし、良い結果をだすことである。
- 3) 権力を委託した物が権力を委託された者をチェックするための仕組みである。

柳瀬（2005）の上記の説明を大学の授業に関して言うならば1)は学生の授業評価の結果であろう。学生が授業を受けて教員が責任を果たしたかチェックできる。本学の授業評価は1の範疇にはいっていると考えられる。2)はきちんと授業をし、その結果学生の学力やスキルが身についたり、学問に対する見識が広まったり、興味がわいたり何らかの結果が生じたかどうかであろう。3)は授業を受ける権利を持った学生やその保護者が教員・大学関係者をチェックすることであろう。または、大学当局者が教員をチェックするための仕組みとも考えられる。本論文では、教員と学生を焦点を当てるために主に1)と2)に絞って論じる。

説明責任という言葉は少なくとも3つの側面があると述べたが、酒井（2005）のように英語教員の説明責任とは学生の学力を伸ばすことを証明することであるというやや極論のような主張をするものもある。この論は少々問題があるのではなからうか。つまり、学力を伸ばすことは教員の目的のひとつかもしれないが、学力の伸びは必ずしも教員の力量に負うところではないからである。また、比較的短期間の授業で学力が向上することを説明責任とするには問題がある。そもそも、学力

を向上させることが説明責任ではないはずである。例えば、学生の興味・関心を高めることは学力向上と一致しないし、教養を高めることも十分に説明責任に値するという論もありえる。

学力向上を学生への説明責任を果たすこととするのはやや極論があるものの、どうして、学力が向上しなかったことを学生に伝え、アドバイスや対策をとることは必要なのではなからうか。そこで本研究では、説明責任を学生からの授業評価、及び教員からのフィードバック（学力が向上したのか、しなかったのか、ならばなぜか）と位置づけ、どのようにして学生へこれから「説明責任」を果たしていくことができるかの可能性を筆者の授業評価を具体例に用いて、その可能性と課題を探っていきたいと思う。

2.2 本学のアンケート結果と説明責任

このセクションではまず、筆者の授業評価（アンケート結果）を用い、その問題点を指摘する。その前にこの研究の背景（筆者の授業）を述べる。

英文科での必修英語（英語）の位置づけとその概要

英文科で必修英語（から）は1年次と2年次に開講されている。英語は1年次の春学期、音声指導に焦点があてられ、英語は1年次の秋学期に開講し、英語の規則（文法）の習得にあてられる。つまり、1年次には基本的な英語力を身につけることを主眼にしている。一方、英語とは2年次に開講されていて、その指導内容は担当教官に任されている。その目的は1年次の学生の英語の基礎学力を定着・発展させることに重点を置いている。

筆者の場合、2年次の春学期と秋学期はTOEIC（Test of English for International Communication）を題材として授業を担当し

ている。その大きな理由は、文学部の学生は英語教員と一般企業の就職を希望する学生が多いため、彼らのニーズにあうような内容にする必要があると考えたからである。その点、TOEICは両者がある程度満たすことが可能であると判断した。例えば、前者の場合、文科省(2002)が発表した『『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』において、英語教員が備えておくべき英語能力を、英検準1級、TOEIC, 720点、TOEFL, 550点などの数値が設定されている。後者の場合、TOEICが企業就職に有利になることはよく知られている。勿論、英検対策のような授業も考えられたが、英検の場合、級によって多少問題傾向が違っているために様々なレベルの学生がいて、40人弱というクラス規模にはなじまないと考えた。しかしながら、英検という学生にとって最も身近な資格試験をまったく無視をすることはできないと考え、テキストを選択するときに考慮にいった。テキスト選択の件は以下に述べる。

授業の流れ

授業の流れは、リスニング問題、文法問題、読解問題を学生に解いてもらい解説をした。また、毎週金曜日に小テストを実施した。TOEICはスピードとの戦いであるため、予習はする必要がないことを学生に伝える。むしろ、復習をしっかりとるよう指導する。

評価

学生の評価は大きく4つに分けて以下のよう定めた。

- (1) 小テスト(20点×10回、計200点)。前回の授業の復習テスト、毎週金曜日に行った。
- (2) 中間テスト(80点)
- (3) 期末テスト(120点)。テキスト全範囲から出題した。
- (4) 出席点

無欠席は10点。1回欠席は9点、2回欠席は8点を与えた。出席点はボーナスポイントというべきもので英語能力そのものには直接には関係はない。しかし、教育的配慮から、また、学生の動機づけとして成績に加味した。

成績の仕方は、合計400点満点で、60%以上69%以下の場合C、90%以上はA A というように大学の基準に沿って評価した。

テキスト教材

テキストは栄宝社から出版されている「Log on TOEIC700」を使用している。

このテキストは他のテキストに比べて全体のバランスがとれている。特にリスニング(写真を用いた)問題が多く含まれている。また、英検2級・準1級と類似した問題があり難易度的にも適当であると思われる。どのテキストも授業担当者が完璧に満足のいくテストはほとんどないだけに、このテキストは概ね学生に合ったテキストと判断した。このことは大学の授業用評価アンケートで検証していく。その他にETS(The Educational Testing Service)から出版されているTOEICのテキストを資料集として適宜使用した。

2.3 授業評価を受け取った感想

自己回顧

このセクションは筆者の授業評価の結果を例にとり、授業内での説明責任とは何かについて考えていきたいと思う。表1は今年度の春学期の英語の筆者の授業評価である。全体的にみるとそれぞれの質問項目が概ね4.5以上超えてまずは正直安堵した。

そこから筆者はあまり思わしくない質問項目をチェックした。

- ・Q4(積極的に質問や意見などの発言をした)
- ・Q5(授業に集中した)
- ・Q15(授業を超えた内容にふれることができた)

・自由研究

・Q18 (シラバスは役に立った)

筆者は上記の4つの項目を特に考慮して授業をやらなければと思った。特に最も低いIQ4には注意を向けなければならない。また総合評価(Q19)は満点だったので、まあ良かったと思って、その結果は机のどこかに置かれることになるだろう。この結果を踏まえて授業改善すれば、前述したように次の学期の学生にはこの結果を還元できると思われるがアンケートに答えてくれた学生には還元することは難しい。

表1：本学のアンケート結果 (N=35)

| 1(授業の取り組み) | 2(授業の進め方) | 3(科目の内容) |
|------------|-----------|-----------|
| (Q 1) 4.7 | (Q 7) 4.7 | (Q13) 4.8 |
| (Q 2) 4.9 | (Q 8) 4.8 | (Q14) 4.8 |
| (Q 3) 4.3 | (Q 9) 4.9 | (Q15) 4.2 |
| (Q 4) 3.5 | (Q10) 4.4 | (Q16) 4.9 |
| (Q 5) 4.1 | (Q11) 4.8 | (Q17) 4.9 |
| (Q 6) 4.4 | (Q12) 4.8 | (Q18) 4.1 |
| (Q19) 5.0 | | |

授業評価の改善案:説明責任と関連づけて

本学の授業評価は大きく分けると3つになっている(表1)。1つは学生自身の授業への取り組み、2つは教員の授業への取り組み、3つは授業の内容である。この3つの項目を説明責任と関連づけると、1は言わば、学生の責任といえる質問項目であろう。一方、2と3は教員の説明責任であろう。特に2は重要で授業そのものに対する学生の反応である。適切な教材を使用したかどうか、教員への説明は明快であったか、つまりは学生から教員へのメッセージである。

こうしてみると本学の授業評価の質問項目は学生の責任と教員の説明責任と関連づけられており良く作成されているものの、筆者は

いくつかの問題点に気がついた。

一つは学生のバックグラウンドの調査、特に学生のニーズにあっていないかという項目がないことである。言うまでもなく、すべての学生のニーズに応えるのは難しいかもしれないが、説明責任を果たす観点からは必要な項目である。つまり消費者の満足度を向上するためには欠かせない項目ではなからうか。

もう一つは、受講したクラスサイズが適当であったかどうかとも学生に聞く必要があるのではなからうかという点である。聞いたからといって大学の運営上すぐに改善することは困難かも知れないが、上記の消費者の満足度に例えるまでもなく大切な質問項目であるといえる。

次に、本学の授業評価自体ではないが、実際に学生の英語能力(ここでは狭義の意味でスコアが伸びているかどうかを指している)が向上しているかの観点が必要であろう。学力が授業で伸びたかどうかということは重要ではあるが、むしろ客観的に、学生にフィードバックする必要があると思われる。つまり、授業評価は学生から教員へ、学生の英語能力の変化は教員から学生へのフィードバックの一つになりうるものである。ここで大事なことはこのフィードバックは授業期間内に実施することが望ましい点である。ともすれば、教員から学生へのフィードバックがなされるのは最後の評価(AA,A,B,C,D)であって、学生の興味・関心は単位を取得したかどうかによってしまう傾向がある。しかも最終的な結果だけでは、学生がどの程度の学力を取得したかは不明である。教師から学生へ具体的な数字で報告することは、学生自身の自己反省を促す機会を与えることにつながると考える。ここでは詳細を省くがこのことは動機付けを高めることにつながるとの報告もある(Dornei, 2001)。

3. 調査方法

3.1 研究課題

以上の状況から学生に調査すべき重要な項目は、教員が担当している授業が学生のニーズに合っているかどうかであろう。そして学生に伝えるべき重要な項目の一つは学生の英語能力は伸びたかどうかであろう。よって以下のような研究課題（リサーチクエスチョン）を設定した。

- Q1: この授業はどれくらい学生のニーズに
 応えているのか。
 Q2: 学生は学期初めと終わりの生徒では成績
 がどれくらい伸びているか。
 Q3: 授業での小テストは学生のTOEICの成績
 の伸びに関係があるのか。

3.2 データの収集方法

データは3つの方法によって収集された。

- (1) 筆者独自のアンケート（参考資料1）
- (2) TOEIC模擬テストの結果
 （4月時と7月時）
- (3) 小テストの結果

(1)は2.3で述べた問題を基に学生の背景（ニーズ、取得したい英語の資格）や学生の授業や小テストに対する態度を探るために作成された。(2)は学期の初めの授業の時と学期の後半（7月初旬）に行われた。(3)は毎週金曜日に行われた小テスト10回分のデータである。

4. 結果

Q1: どれくらい学生のニーズに応えているか？

学生のニーズを調べることは、説明責任を果たすうえで大切な要素である(Nunan, 1988)。また、授業を進めるうえで欠かせない情報である。その前に学生の能力をある程度知ること重要である。学生のニーズが学生の能力より非常に高いものであれば教員は調整する

必要があるからである。

このクラスの場合英検取得者は約半数以上（2級、7人、準2級、14人、3級、5人）であった。一方わずか5人あるがTOEICを受験している学生がおりそのスコアの範囲は420～625点と200点の差があった。何も取得していないまたは無回答は7人であった。予想されたことであったが40名弱のクラスであっても学力の差は著しいことが判明した。

次の質問であるが大学在学中、どのような資格を取得したいのかをひとつに絞って質問した。その結果が表2である。

表2：在学中最も取得したい資格（N=35）

| 資格別 | 内 訳 | | |
|---------------|---------------|------------------|---------------|
| 英検 (10) | 1級 (3) | 準1級 (5) | 2級 (2) |
| TOEIC (24) | 600点未満 (2) | 600-700点 (13) | 700点以上 (9) |
| TOEFL (1) | 200以上 (1) | | |

()は人数

表2は在学中に学生が最も取得したい資格、およびその詳しい内訳を示している。約69%の学生がTOEICと答えておりその中でも600-700の範囲がもっとも多い。英検では準1級が最も多いことがわかる。これは偶然にも文科省（2003）の「日本人の英語を使う戦略」の英語教員の数値目標に合致している。学生のコメントにもそのことが現れている。

- ・教員採用試験・英語教員に求められているから (12人)
- ・就職・留学に有利だから (7人)
- ・英文科・単位免除のため (6人)
- ・その他 (10人)

この質問では、多数の学生は資格取得に興味・関心がある。しかも、具体的に数値目標まで持っていることがわかる。そうした上で

今回の授業はある程度このクラスの学生のニーズに沿ったものであるといえよう。さらに、使用したテキストも学生のニーズに沿ったものであるといえる。これは本学の授業評価のQ12（テキストが適切であった、表1参照）の結果にも裏付けられているように思える。ただ、ここで注意しておかなければいけないことは、アンケートの問いは最も取得したい資格であって、最も取得したい技能（英語力）や受講してみたい授業内容に関して質問しているわけではなく、学生の多くが資格のみに関心・ニーズがあるという意味ではないので注意を要する。学生のニーズがどのような授業内容であるのかという調査は今後行うべき項目の一つであり、そのニーズに少しでも応えることは必要なのではなかろうか。

Q2: 学生は学期初めと終わりでは成績がどれくらい伸びているか。

総合点を見ると約75点向上したことがわかる(表3)。この伸びを少ないとみるか、多いとみるかは判断しかねるが正直ほっとしたところである。

表3: 4月と7月のTOEICの平均点の違い

| | パート1 | パート2 | 総合点 |
|----|------|------|------|
| 4月 | 210点 | 140点 | 350点 |
| 7月 | 240点 | 185点 | 425点 |

ちなみに7月の全体の平均点の425点とは日本の大卒新入社員平均（海外経験なし）に近い点数である。

(http://www.eigotown.com/jobs/special/toEIC_score/toEIC_score.shtml)

パート1（リスニング）もパート2（文法・語彙・読解力）もどちらも伸びていることがわかる。

しかしながら表4を見ると必ずしも楽観的ではいられないことがわかる。

表4: 個人別のテスト成績（N=35）

| | 上がった | 変わらず | 下がった |
|----|------------|----------|-----------|
| 人数 | 25人(71.4%) | 2人(5.7%) | 8人(22.9%) |

約70%の学生が伸びた、その一方で約22%の学生が前よりも成績をさげてしまった。約2%が変わらずであった。さらに詳しくこの2つのグループ（上・下）について論じてみたい。

まずは伸びたグループの中の上位5名（A～E）だけのコメントを表5にまとめてみた。

表5: 7月のTOEICの点数が上がった学生のコメント（上位5名）

| 学生 | 理由 |
|----|---|
| A | 7月の方が集中力が断然あった。長い間集中していられるかがTOEICには不可欠。 |
| B | 4月も7月もリスニングが良くなかった。最後の10問くらいは時間が足りなかった。 |
| C | 春から勉強したことがつながったと思う。もっとリスニング力が必要。 |
| D | リスニングがだいぶあがった。でも文法はあまり上がっていなかった。もっと授業をしっかりとやるべきだった。 |
| E | TOEIC以外にも洋楽を集中して聴いたりして耳に英語に慣れるようにした。 |

表5では具体的に自己を評価している様子が見えてくる。例えばAはTOEICは集中力が必要であると考えている。BとDは否定的に評価しCとEは肯定的に評価をしていると言えよう。いずれにしても、上位5人は自己評価（分析）が具体的に示されていると考えられる。

一方、表6は下がった学生8人のコメントを簡潔にまとめたものである。どうしても否定的なコメントが多くなるのはやむをえないのだが上位と比べて結果にだけこだわり具体

的な自己評価がなされていない。このような学生には少々時間をとって具体的に指導する必要はないだろうか。

表6：7月のTOEICの点数が下がった学生のコメント

| 学生 | 理由 |
|----|------------------------------|
| A | 勉強不足だったと思う。 |
| B | 知識が増えてたのに、7月のテストは集中できませんでした。 |
| C | リスニングは勉強しなかった。 |
| D | 体調が悪かったから、集中できなかった。 |
| E | 集中力がなくなった。 |
| F | 無回答。 |
| G | 毎日TOEICの勉強をしなかった。 |
| H | 時間配分のミスで最後の30問は解いていなかった。 |

つまり、学生の成績が伸びることは重要なことだが教員が説明責任を果たす上では成績が下がった学生にどうして下がったのかを教員からフィードバックして学生に納得してその対策をとるように仕向けることが大切なのではなからうか。そのためには判断の材料（ここではスコア）を示すことでより説得力のある指導ができる。そのために筆者は面談の時間を設けるようにしている。

Q3:小テストは学生のTOEICの成績の伸びに関係があるのか。

Q3は週一回行われる小テストがTOEICのテストに関係があるのかを検証する。小テストは授業のテキストを基に作られその点数が7月のTOEICとある程度高い相関関係にあるならば小テストはTOEICの点数の伸びに寄与していると考えられる。つまり、小テストを勉

強した学生はTOEICの成績が伸びることに関係があるのかという問いである。さらに言えば、小テスト（授業）を行うことは学生の伸びに効果があったのかという質問ともいえよう。

表7は小テストとTOEICの相関関係を示したものである。TOEICは7月の点数を小テストは10回分の合計点を用いた。

表7：小テストとTOEICの相関関係

| | 小テスト |
|---------|----------------|
| TOEIC | 0.394 (P<0.05) |
| 文法・語彙のみ | 0.592 (P<0.01) |

左の欄の「TOEIC」とはすべての点数でリスニングも含まれ、「文法・語彙のみ」とはリスニングが含まれていない場合の小テストとの相関である。表7で明らかのように文法・語彙だけとの相関がTOEICすべての相関係数よりも高いことがわかる。どちらも統計的に有意であることもわかる。よって小テストの効果はあると言えよう。つまり毎回小テストをがんばった学生はTOEICの文法・語彙を伸ばすことと関係があったということの意味している。これは小テストが申し分ないということではまったくない。もっと工夫すればリスニング問題を小テストに入れることも可能であったが今回は時間の制約上できなかった。次回の課題であろう。

5. 考察

学生の背景（実力やニーズ）を前もってある程度把握し、できるだけそれに応えることは重要である。今回の授業（TOEIC対策）ではその事がある程度満たしていたであろう。しかしながら、学生によっては取得したい目標点数が広範囲にわたり、英語力も差が著しいためにニーズを満たすことはかなり難しいこともわかる。

結果は筆者が担当したクラスだけのもので

あるから、英文科の学生全体がこのような傾向があるのかはどうかははっきりしない。ただし、学生が何を求め、どのような授業を期待しているかという事は一度調査をやって見る必要があるのではなからうか。また、授業評価にも取り入れる必要があるのではなからうか。他学部（一般英語）もその必要があるのではなからうか。そのことが説明責任を果たすことの一步であるような気がする。

次に大学教員の説明責任として学生の実力を適格に把握することが必要であるということがわかる。実力を伸ばすことは勿論、どうしてそのような結果になったのかを学生自身に考えさせ自己学習につながるような指導をすることが大切なことではなからうか。また、どうしてそのような結果になってしまったかがわからない学生には個人面談等の個別的な指導が必要であろう。幸い、英文科ではCASE C (Computerized Assessment System for English Communication) という英語のテストをコンピュータで受験できるような体制が整っている。学生は自分で受けてどこが弱いかすぐわかるようになっている。このような恵まれた環境にあるのにも関わらず、学生は自発的にはあまり受験してないようである。今後、学生が受験したら学科に報告して、例えば担当教員がチェックするような仕組みができれば科としての説明責任を果たすことになるのではなからうか。

6. 結論：これからの課題

今後、大学において授業評価はますます重要な位置を占めると思われる。学生の授業評価を教員の評価と直結することには賛成はしない。しかしながら、学生が何を望みどのような期待をしているのかを把握することは将来的には大学の存亡に関わる由々しき問題であろう。

次に双方向フィードバックするシステムは将来可能であるかどうか検証する必要がある

う。大学の授業評価のように学生から教員への一方方向ではなく、最終的な成績だけでなく教員からフィードバックするシステムの確立である。勿論、本学の教員は日々学生へフィードバックしているからその必要性はないという論もあろう。しかし、説明責任は学生のみならずその保護者も関係しているからある程度統一した透明な制度が必要ではなからうか。

これから説明責任（アカウンタビリティ）という言葉が大学に入ってきてそれを果たすことは当たり前という時代がやってこよう。事前の対策をとっていかなければならない。勿論、学生諸君の大学や教員に対するレスポンスビリティも果たさなければならない。双方のコミュニケーションがより求められる時代になったことは間違いなさそうである。

参考文献

Dornei, Z (2001). Motivational strategies in the language classroom. Cambridge: Cambridge University Press.

金谷憲 (2003). 「英語教育評価論」東京：河原社。

松沢伸二。(2002). 「英語教員のための新しい評価法」大修館書店。

文部科学省 (2002) 「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」の策定について- 英語力・国語力増進プラン

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm

Norton, B. (1997). Accountability in language assessment. In C. Clapham and D. Corson (Eds.), Language Testing and Assessment. Encyclopedia of language and education (Vol. 7), (pp.313-322).

Dordrecht, Netherlands: Kluwer Academic.

Nunan, D. (1988). The learner-centered curriculum. Cambridge: Cambridge University press.

酒井志延 (2005、5月号) . 大学英語教員
のアカウントビリティって. 「英語教育」.
22-24.

Simmons, T. (1996). Student evaluation
of teachers' professional practice or
punitive policy? Shiken, JALT &
Evaluation SIG Newsletter. 1, 1, 12-16.

柳瀬陽介 (2005, 5月号). '05英語教育キー
ワード. 「英語教育」. 28-31.

山田雄一郎 (2003). 「言語政策としての英
語教育」. 溪水社.

参考資料

【アンケート】

名前

このアンケートはこのクラスの評価にはまっ
たく関係ありませんので、率直にご意見を書
いてください。

あなた自身のことを聞きます。今、何か英
語と関係ある資格を持っていますか。

資格名 ()

取得級(点数)()

あなたは在学中、英語と関係ある資格のな
かで、一番何を取得したいですか。一番取得
したいものひとつだけ記入してください。

(1) 英検 (1級、準1級、2級、準2級)

(2) TOEIC () 点以上、

(3) TOEFL () 点以上、

(4) CASEC () 点以上、

(5) その他 ()

理由 _____

あなたはこのクラスを受ける前にTOEICを
どれくらい知っていましたか。もっとも当
てはまるものに () をつけてく
ださい。

(1) 全く知らなかった。 ()

(2) 名前だけは知っていた。 ()

(3) どのような問題があるかは知っていた。
()

(4) 以前TOEICを受験したことがある。
()

その他 _____

このクラスについて聞きます。

(1) このクラス (英語) はあなたの授業
のニーズにあっていると
言えますか。
(で囲む)

はい、まあまあ言える、どちらとも言えない、
あまり言えない、いいえ

(2) 上で選んだ理由を簡潔に書いてくださ
い。

(3) あなたはこのクラスの
小テストのために勉強
しましたか。下に当ては
まるものに をつけて
ください。

はい、まあまあ言える、どちらとも言えない、
あまり言えない、いいえ

(4) 上の理由を選んだ理由を簡潔に書いて
ください。

(5) あなたはこのクラス
を受けてからTOEICに
ついて興味をわきまし
たか。

はい、まあまあ言える、どちらとも言えない、
あまり言えない、いいえ

4月と7月のTOEICの結果をみて :

どうしてそのような結果になったと思いま
すか。理由を簡潔に書いてください。

